〔特集：国際フィールドワーク〕

「国際フィールドワーク」を国内で実施する可能性

インバウンドツーリズムを利用した異文化交流促進装置として

A Prospect of "International Fieldwork" within Japan

A device for multiplex cross-cultural exchange utilizing inbound tourism

岩　田　晋　典

IWATA Shinsuke

愛知大学コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskeiwata@gmail.com

１．はじめに

国際コミュニケーション学部の展開科目「国際フィールドワーク」の国内開催は、制度上の問題を中心に課題がいくつかあり、これまで実現されずにきた。今日でも状況に変わりはないが、本稿では将来的に国内で開催することを視野に入れて、国内開催の可能性や意義、想定しうる問題点について論じたい。とくに、観光研究と連携させる形で、日本国内における「国際フィールドワーク」の実施を構想してみようと思う。

以下では第一に「国際フィールドワーク」の特徴を二つの側面から挙げたうえで、次に観光研究と連携させた授業案について説明する。第三にこの授業案が持つ特長について論じ、最後に課題や注意点を挙げる。

２．「国際フィールドワーク」の特徴

今日フィールドワークは、質的なものにしろ量的なものにしろ、さまざまな大学で学ぶことができる。ディシプリンも人文科学、社会科学あるいは自然科学といったようにさま

ざまだ。また、フィールドワークがゼミの一環で行われることもあれば、実習科目として調査法を学ぶ独立した一科目の中に位置づけられていることもあるであろう。あるいは、卒業研究のデータ収集法として学生が指導教員から個別でフィールドワークのやり方を学ぶというパターンも考えられる。

本章では、二つの作業を通して、「国際フィールドワーク」の特徴を探ってみようと思う。第一が、少人数で国内の限られた地域社会について調べる通年開催の実習科目という、おそらくけっして例外的ではない形態（以下、一般的実習科目と呼ぶ）との比較であり、第二が観光研究からの考察である。

１）　一般的実習科目との比較

一般的実習科目と比較した場合、「国際フィールドワーク」の特色は二点挙げることができる。すなわち、現地調査の期間（２週間）が一度だけに限定されているという点、そして、調査地が海外であり、日本語以外の言語を用いて調査するという点である。

一般的実習科目では、たしかに教員と参加学生が全員参加する現地調査が夏期休暇期間中の数日間に限られるということがあるかもしれないが、よほどの遠距離でないかぎり、報告書の作成までに必要に応じて調査地を再訪し、補足調査をすることが可能である。学生の熱意・取り組み方次第で、それが参与観察的な密度の濃いフィールドワークに発展する可能性も珍しくなかろう。

それに対して「国際フィールドワーク」では、学生が高価な航空運賃を自ら出費してまで海外の調査地を再訪することは当てにしない方が妥当である。多くの学生が抱く様々な地域を訪れたいという欲求や彼ら彼女らを取り巻く経済的事情を考慮に入れると、学生にそれは到底期待できない。

第二の調査言語についてであるが、調査も成果報告書の作成も基本的には日本語で行われる。国際コミュニケーション学部としてはそれ自体が一つの課題であろうが、学生の多くが現地調査で日本語以外の言語を駆使するレベルにない。こうした言語能力の有無が現地調査で収集しうるデータに大きな影響を及ぼすことは言うまでもない。

２）観光研究からの考察

観光研究から見た場合、「国際フィールドワーク」はアウトバウンドのツーリズムの一形態とカテゴライズできる。従来のコースでは全て“フィールド”が国外に設定されており、そこを学生が visitor として訪問する形態になっている。

それは、ホストとゲストという分け方からすれば、学生がつねにゲストとして“異文化経験”や“国際交流”を試みてきたということになる。けれども視点を変えて、学生がゲストではなくホストとなりつつも調査方法を学ぶことが出来るような授業のあり方はあり

得ないのであろうか。この点こそが本稿のポイントになる。

さて、以上の議論をまとめると、「国際フィールドワーク」の特徴は三点、すなわち、短期間一度だけの開催、基本的に日本語による調査と情報発信、そして、ゲストとしての国際経験、とまとめることができる。「国際フィールドワーク」と観光研究を連携させたモデルケースを以下述べていくが、あらかじめ言及すると、そこではこれらの特徴が逆転あるいはかなりの程度変化して現れることになる。

３．インバウンドツーリズムと関連させた授業案

１）概要

前章では、若干抽象的に「国際フィールドワーク」と観光研究の連携について触れてきた。以下ではその連携を利用した授業案をより具体的に考えてみよう。

「国際フィールドワーク」の目標は、現地調査の実施とそれをふまえた報告書の作成である。当授業案では、名古屋市内（あるいはその周辺）で現地調査を行ない地誌的な報告書をまとめるが、それをさらに「外国人旅行者を対象にした名古屋市内のウォーキングマップ」として複数の言語で作成し、かつウェブ上に公開することを目標とする。

調査内容は、対象地域の歴史民俗や観光対象ならびに観光資源である。本学部留学生を積極的に参画させることで、外国人旅行者が好みそうな対象を見出し、参加学生全員で地誌的な情報を補強したうえで報告書を作成する。

２）授業のスケジュール

授業を進める上では、大きく以下のような段取りを踏むことになる。これらの段取りはあくまでも大まかなものである。フィールドワークの常として、実際には重複したり、繰り返したりすることは避けられない。

①選定

ウォーキングマップを作る場所の選定は、候補地の歴史民俗をはじめとする地誌的な情報の把握から開始する。すでにウォーキングマップが作成されている地域を参考にしつつ、いくつかの候補地を選び、その中から調査地を決定するというのが妥当なプロセスであろう。

調査対象地域は街歩きに適した面積に合わせて選定しなければならない。街歩きをする人物像としてどのような年齢層やジェンダーあるいは信仰を想定するのか、当地の地勢はどのようなものか、街歩きの基点となりうるポイントはどのように分布しているかなど、諸々の条件とともに歩行に要する時間を勘案して選定をする必要がある。

選定の作業において学生は、オリジナルな情報を作り出す必要性をつねに認識しなけれ

ばならない。多種多様、玉石混交の情報が溢れるウェブ上では、何らかの独自性を平易かつ明瞭に現すことが出来ないかぎり、発信した情報は見向きもされない。要は既存のウォーキングマップとの差別化を試みる必要があるということである。

教員の中には、一番重要なのは学生が実際に調査をして報告書を作ることであり、その内容は二の次だと考える者もいるかもしれない。たしかに参加学生の能力次第でそう考えざるを得ないケースも少なくないであろう。けれども、情報の価値やその発信方法について学ぶことは、メディアリテラシーの重要性が叫ばれる今日では不可欠であるし、さらに、生活世界の少なくない部分を“ネット”が占める学生にとっては、知的関心を高めることができる試みなのではないかと思われる。

②現地調査（予備調査や補足調査を含む）

①で触れたように、現地調査は調査対象地域の選定から始まるが、文献・各種資料も読み込んだ上で本調査を行なう。予備調査と本調査は全員参加となる。予備調査の後では各人がアイデアを出し、KJ 法などを用いて、ブレインストーミング的に計画を練ることが理想的である[1)]。

また、適切なタイミングで③も開始し、適宜担当者が補足調査を実施しつつ、データを補強していく。

調査地に必要に応じて複数回通うことができ、また参与観察的な調査スタイルへの発展へ道が開かれている点は、先に述べた従来の「国際フィールドワーク」の特徴の一つ、すなわち短期間の一度きりの調査とは異なる。

現地調査では空間やモノの観察と、当地の人々に対する聞き取りが主となるであろう。後者についてさらに言えば、場所やモノにまつわる伝承や逸話、ライフヒストリー、そしてライフストーリーを語ってもらうといった調査内容を想定できる[2)]。

③報告書ならびにウォーキングマップの作成

成果報告書は従来どおり、日本語で作成する。そのうえで成果報告書のダイジェスト版としてウォーキングマップも作成する。ウェブ上での公開を考慮に入れると、ウォーキングマップはA 4 サイズにするのが妥当であろう。

④ウォーキングマップの複数の言語への翻訳作業

多言語による成果の発信は、従来の「国際フィールドワーク」では実践されてこなかったが、ウォーキングマップが外国人旅行者を対象にしている以上、この作業は不可欠である。

1）KJ 法については（川喜田、1984年）を参照。
2）「ライフヒストリー」と比べて「ライフストーリー」にはいくつかの特徴があるが、ここでは、とくに人生という比較的長いスパンに関連させずにより自由に語られる「人生のある時期の一つのエピソード」（大久保、2008）というような語りを想定している。

ウォーキングマップは日本語のほかに、中国語や韓国語、そして英語で作成することを考えている。翻訳をこれらの 3 言語で行う理由は、英語は世界の共通語、中国語は簡体字と繁体字の区別はあるとしても中華圏からの旅行者の母語、そして韓国語は韓国人旅行者、というように、日本を訪れる外国人旅行者の多数が用いるからである。

これらの 3 言語は翻訳作業の面でも最適である。英語は、日本人学生のみならず留学生にとっても流暢な者が少なくない言語であるし、英語学科教員からの協力も期待できる。また、本学に在籍する中国や韓国からの留学生を授業に参加させることができれば、中国語や韓国語への翻訳も行いやすい。もちろん参加留学生の使用言語や外国語科目担当教員の協力次第で、タイ語やドイツ語、フランス語、スペイン語というように翻訳言語を適宜増やすことができよう。

いずれにしても、翻訳作業では留学生あるいは教員の参画が重要な条件となる。

⑤報告書とウォーキングマップの公開

成果報告書として普通の紙媒体の報告書とそのエッセンスのようなウォーキングマップを作製する。前者は調査でお世話になった方々へのお返し（配布）と図書館等での保管・閲覧のためである。

後者は、複数言語に翻訳し、ウェブ上で広く公開する。理想的には、たとえば Google Map などの無料サービスを活用したウォーキングマップを作り、外国人旅行者にはスマートフォンなどのモバイル機器を使ってマップを利用してもらうといった姿が望ましい。要所要所に博物館などの他機関が作成するサイトやブログにリンクを貼ったり、すぐにネット検索できるようにしたり、あるいは、天気予報サイトにアクセスできるようにしたり、さらには、Facebook や Twitter などの SNS サービスや画像・動画サイトとの連携を持たせるなど、ウェブの特徴を最大限に活かしたウォーキングマップを作製できれば、利便性が高い上に利用していても楽しいウォーキングマップを提供できる。

ただし我が国の WiFi 事情は、近隣諸国と比べて大きく遅れており、外国人旅行者が手軽に無線 LAN を利用できるような状態にはない。現状では、ウォーキングマップを PDF ファイルで公開するといった、きわめてアナログ臭のある方法を取らざるを得ない。

ウォーキングマップを公開する理由はいくつかある。まず調査でお世話になった方々に成果を公開する方法として、紙媒体は別にして、今日のメディア状況下ではウェブ公開がもっとも優れていると思われるからである。もちろんウェブという多数の人々がアクセスしやすい条件下では、知れ渡ることによって生じる独特の問題があり、それについては留意しなければならない。この点については最終章で取り上げる。

次に、先に述べたように、フィールドワーク授業にメディアリテラシー教育的な要素を

含ませることができるという利点もある[3)]。ウェブ上で公開する作業を通じて、ウェブ情報を見る目を養うことができる。また、ウォーキングマップを見た人々、あるいは実際に利用した人々からのフィードバックも期待でき、そうしたフィードバックにさらに対応する必要性、いいかえれば自らが生産・発信する情報へ責任を持つ重要性も知ることができよう。

もちろん、地域社会へのフィードバックとしても公開は欠かせない。それが生産しうる問題点もたしかにあり、それについては後述する。

最後に、ウェブ上で公開することで、本学部への宣伝効果が期待できることについても言及しておこう。入学希望者の中でフィールドワークや留学生との交わりに関心を示す者は少なくない。学部ホームページに報告書やウォーキングマップのサイトへのリンクを貼るなどすれば、良いアピールとなるであろう。

４．授業案の特長

以上述べてきた授業案の特長はまとめて言えば、「国際フィールドワーク」が異文化交流を三つのレベルで促進する装置として機能しうるという点にある。

第一に、外国人旅行者を対象にしたウォーキングマップを作製することで、インバウンドツーリズムという文字通りの異文化交流を促進しうる。先に用いたホストとゲストという分け方を用いれば、従来の「国際フィールドワーク」では学生はつねにゲストであったが、この授業案では学生はホストとしての役割を果たすことが可能になる。

すなわち日本人学生であるにしろ留学生であるにしろ、日本社会で暮らす者が身近な空間の中で「魅力」の発見し、日本の一地域社会の「魅力」をウォーキングマップという旅行案内を通じて外部に発信し、外国人旅行者が実際にその案内を利用して「魅力」を楽しむ。こうした旅行のあり方は、ツーリズムが持つ異文化交流という特質そのものである。

参加学生はこうした流れの中で、ツーリズムが総合的な現象であることはもちろん、インバウンドツーリズムの重要性を体験的に学ぶことができるであろうが、とくにホスピタリティの問題についても言及しておきたい。

インバウンドツーリズムにおいてホスピタリティのポイントは、外国人旅行者が不慣れな異国の地においてトラブルはもちろん不快な思いをしないで旅行地を楽しむことができるように補助するという点にある。この授業案で目標とするウォーキングマップの作成においても、外国人旅行者が街歩きを楽しむことができるという点をつねに念頭において作

3）これは何も本稿で論じる授業案に限った話ではなく、成果をウェブ上で公開するのであれば全ての「国際フィールドワーク」に該当する。

業に当たらなくてはならない。たとえば休憩場所や飲食施設、快適なトイレの有無、そしてトラブル処理方法の紹介である。昨今メディアをにぎわす“外国人旅行者へのおもてなし”も、ウォーキングマップの作成を通じて、学生に考察を促し、かつ、ホストとして実践に取り組ませることができる。

第二が、日本人学生と留学生がともに授業に参加することによって深まる交流である[4)]。両者が人間として交流を深めることができることは当然として、日本人学生は留学生との協同調査の中で、日本社会内部とは異なる“外”からの視点で地域社会を眺めること、ならびにその面白さを学ぶであろう。その一方で留学生は、協同調査を通じて日本の地域社会について詳しく学ぶ機会を得ることになろう。

第三の異文化交流は、日本人学生か留学生かにかかわらず参加学生の中で生じるものである。この授業案では翻訳がカギになる。調査で調べた事柄を日本語と非日本語の間で変換する作業は、調査開始時から現地調査を経て文字通りの翻訳作業を行うウォーキングマップの作成・公開にいたるまで、全行程において断続的に進行する。日本人学生は日本語に、外国人学生は非日本語に、というような重心の置き場所に違いはあるかもしれないが、複数言語間を行き来するという、異言語間の交流が発生するという点には変わりがない。こうした一種の異文化コミュニケーションが各々の翻訳者、そして翻訳に当たる仲間同士のうちで生じるのである[5)]。このコミュニケーションは、報告書の公開後もウェブ上でのフィードバック（コメントや質問）に対する返答という形で継続するであろう。

5．留意すべき点

最後に本章では、当授業案の課題あるいは留意すべき点を二つ挙げたい。第一はすでに触れた留学生の参加である。この授業案の要点の一つはウォーキングマップの多言語翻訳にある。翻訳作業も学習の一環であるが、日本人学生のみで対応するには限界があろう。たとえ外国語科目担当教員からの協力があったとしても、留学生が中心になって翻訳作業に当たることが望ましい。できるだけ多くの留学生を参加させることが授業成功のカギになる。

第二が調査地被害と観光公害の問題である。現地調査が調査対象地域の人々にとって多大な迷惑になりうることや、さらには調査対象を大きく変えてしまったりその破壊にさえつながりうることは、「調査地被害」という言葉で論じられてきた[6)]。調査者による配慮の

4）ここでは、日本語を第一言語にする学生といった程度の意味合いで「日本人学生」という用語を使用している。
5）異文化コミュニケーションとしての翻訳についてはたとえば（平子、1999）を参照。
6）「調査地被害」については（宮本・安渓、2008）を参照。

ない調査は、勝手に調査される側を巻き込んで、調査される側はもちろんのこと、逆に調査する側にも悲惨な結果を生み出しうるのである。

調査実習が調査地被害を産出しうる危険性は、この授業案に限らず、すべての実習調査に言えることである。とはいえ、この授業案の場合、観光と関連していることから、調査地被害がいわゆる観光公害と結びついて問題化する可能性があり、いっそうの注意を要する[7]。

もちろん“ツーリズムによって伝統文化が破壊される”という単純素朴なツーリズム悪玉論は取らないし、大学の授業である以上調査地の非道徳的部分や犯罪に関わることはありえない。けれども、授業で作成するウォーキングマップが予想以上の反響を呼び、多数の旅行者が調査対象地域を訪れることでさまざまな問題が生じるという展開も十分に考えられる。たとえば、ゴミのポイ捨てが増える、静かであった街路がうるさくなる、あるいは単に生活空間に見知らぬ者が多数出入りすることが住民にとって苦痛になる、などの問題である。

こうした状態を現地住民が不快に思い、旅行者をシャットアウトした場合、それはツーリズムが“持続不可能”になったという事態にほかならない。それどころか、このツーリズムの重要なアクターとして本学の責任問題にも発展するであろう。

こうした観光公害をどう予防するのか。もっとも簡単な解決法は、街歩きの場を公共性の高い空間に限定することであろう。つまり、人々の日常が営まれている場を避け、たとえばビル街といったような“暮らし”の色合いが薄い場所を選ぶというやり方である。

けれども、そういう場所がなかなか見つからない、あるいは、“暮らし”の色合いが濃いがきわめて魅力的で、どうしても取り上げたい地域があったらどうするか。観光の現場で観光とは無関係に生活してきた人々とどのように折り合いをつけるのかという問題はかなり大きなものである。そういう問題を解決しようと学生に努力させるのも教育の一つ、とは口では簡単に言えるのであるが、ユネスコの世界遺産認定が現地で観光客を急増させ、いくつかの地域でトラブルを生んできた事例が示すように、容易には解決できないテーマであり、一つの授業の限界をゆうに超えるテーマだとも言えるのである。

6．おわりに

以上、「国際フィールドワーク」を国内で実施する場合の授業案を、観光研究と連携させながら論じてきた。具体的には外国人旅行者を対象にしたウォーキングマップの作成を

7）たとえば（オグレディ、1983）。内容はナイーブなツーリズム悪玉論と形容したくなるものであるが、「観光公害」として何が問題になるのかについて考える上では今日でも十分参考になる。

目標とする案である。

　そして、こうした枠組みでインバウンドツーリズムと関連させることで、外国人旅行者と日本の地域社会、日本人学生と留学生、そして参加学生の内部で生じる翻訳作業という、三つのタイプの異文化交流を促進する装置として当授業案を位置付けることができるのである。

　最後にこの授業案の実行に際して注意を要する事柄として二点挙げた。授業を成功に導くためにいずれも重要な問題であり、とくに後者に関しては入念かつ柔軟に対処し続ける必要があろう。けれども、だからといってそれらが一つの授業の開講を妨げる要因にはなるとは思えない。将来的には制度的な問題点を解消し、「国際フィールドワーク」の国内実施に乗り出すべきではないかと思われる。

参考文献

川喜田二郎　1984『発想法　創造性開発のために』中央公論社
大久保孝治　2008『ライフストーリー分析―質的調査入門』学文社
オグレディ、ロン　1983『アジアの観光公害』（中嶋正昭訳）、教文館
平子義雄　1999『翻訳の原理　異文化をどう訳すか』大修館書店
宮本常一・安渓遊地　2008『調査される迷惑　フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版